〈第一八話〉熊本縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇〇

遠く故郷を離れ、シベリヤの空の下で抑留苦難の生活に打ち戦ひながら、責任觀の強い熊本縣出身の△△△△君の美談を、ここに偶文ながら一筆お知らせ致ませう。ここシベリヤ、タイセットより約一八五粁山奥の地点、第三九収容所に於ける道路作業、この作業は（昭和21．9．28）当時当収容所に於いては、最重労働であり、最注目要視されたる作業でありました。雪の少しちらちらと降ってゐるこの頃、板敷道路の作業をうけ持った吾が中隊は、ソ連軍の定められた過大のノルマ遂行せんと努力しました。四、五日前頃より△△君は、気分の勝れない様な有様でありました。軍医の診断も受けては見たのですが、異状無しとの区分で作業を休むことが出来なかった。日頃から快活明朗、然も健全なる△△君でありましたので、他人から見ては、その弱ってゐる事が出来なかったのです。起居を共にしてゐた私だけには、充分に分っており、何度となく休む様に進めたのですけれど、作業の重要性、又一人の人員欠にても極端なる能率減少する作業でありましたので、彼は大なる無理を押しても作業を續行しておりました。この間、彼のグループに弱体の戰友がゐた。△△君は、戰友の分迫も助け十分なる成果を納めておりましたが、五日目頃に遂に高熱のため入院する事になりました。入院する時、彼は皆と一緒に作業がしたい。未完成の作業を残して入院するのが心苦しい、すまぬすまぬと言って入院されてゆきました。彼は、ソ連の作業係りからも認められ、ロインカと言った様な字名を持っておりました。残念乍ら、人の話に依ると、遂病のため斃れたとか聞きます。彼の何事においても責任觀の強い事は、この遠くはなれたシベリヤでは稀に見られない位で□た。苦しい生活の中にも戰友を助け、然も自己の責任を畢してゆく涙ぐましい美談の一片、偶文にて十分に披瀝する事の出来ぬのが残念です。

死亡者の住所　熊本縣△△△△△△△　△△△△

以上

## シベリヤ曠野に咲く花（其一五）

（表　紙）

シベリヤ曠野に咲く花（其一五）

昭和二十二年十一月二十日
中部復員連絡局

（表紙裏）

一．本資料は
　昭和二十二年十月二十□日　舞鶴に上陸せる
　昭和二十二年十月二十□日
　昭和二十二年十月二十八日
　昭和二十二年十月三十一日
　復員者より集めた美談である
一．配布先
　全復員関係官署

栄豊丸　高砂丸
白龍丸　第一大拓丸
雲仙丸　遠州丸
恵山丸　信濃丸

〈第一話〉岩手縣〇〇〇〇〇〇〇　少尉　〇〇〇〇

私は終戰以来、彼の有名な「シベリヤ」は「バイカル」湖畔の「イルクーツク」に参りました。収容所は、「バイカル」湖に源を発し、世界の三大河に數へられる「エニセー」河にそゝぐ「アンガラ」河々畔にありました一万二、三千人を容する大きな工場内に、収容所がありましたので、工場内は勿論、材木の流木整理作業等をやっておりました。昭和二十一年八月（日は不明）であったでせう。例によって「ロス」の「ダバイ」の聲を聞きたら、強制せられる厭な仕事を、兵隊は当日黙々として仕事にいそしんでおりました。丁度場所は河畔であったのです。居合せた人員十二、三人も居ったでせう。突然、河の方向より死の寸前にほとばしり出る異様なる女の叫び聲を耳にしたのです。居合わせた者達は、ハタと仕事の手を止めて、その方向に目をやりました。何んと言ふことでせう。急流で尚かつ河水が澄み切った上に冷たく一分間も入って居られない。美しいが恐ろしい河

の岸から30米も離れた所で、約十名程の「ソ」聯の女共が小舟に乗って向ふ岸に渡らうとしたのですが、途中で沈んでしまったからたまりません。ロシヤ人の男も女も岸に居る者共は、唯あれよあれよと忘然自失の態です。その時、件んの附近に働いて居った十二、三名（兵隊下士官）の中から、着物のまゝ四、五名がザンブと河に飛び込んだのであります。勿論、救命の為です。然して彼等の生死を超越した努力により、彼女等の殆んどが助かり、内一、二名のみ溺死しただけでした。

これ等は、実に人道的人類愛的情義に基いてやったもので、尚それが無意識の内に動作として表はれたのであります。日本人の特徴が遺憾なく発揮されたのであります。其の後、別に望む訳ではないのですが「ソ」聯側よりは、此の人名救助に対して何の音沙汰もありませんでした。

人名救助者　△△軍曹（徳島縣出身）外四名（姓名、出身地不明）

〈第二話〉大分縣○○○○○○○○○　中尉　○○○

部隊は、「シベリヤ」が將に嚴寒期に入る十月二十九日、シベリヤ本線「イルクーツク」西方チヱレンホーワに到着、十一月一日より直ちに主力は炭坑作業に從事した。誠にお粗末なバラック建二〇棟に炊事場、浴場等の施設を設けた残余の兵舎に、どっと一度に四千名の戰友が押込められた。その惨状は、御想像以上でした。從って、傳染病の猛威も油の中に火を点じた如く、それも優秀なる皇軍々臣の力を以ってすれば防止できたでせうが、無脳で「ノールマ」主義の彼等□之を如何とも處理し得ず、不幸にして十二月の下旬よりラーゲル内には発疹チフスが爆□た。働かざるものは食ふべからずの鐵則、而も戰後急速なる産業復興の爲に、入ソせしめた吾々も二ヶ月後の正月二日より遂に作業を停止防疫の止むなき狀況となった。其の頃、將校室傳令として服務した上等兵△△△△△△、彼は先づ第一に倒れ、四〇度以上の熱に伸呻する中隊長を先づ第一に、それから逐次倒れる中隊付將校、果は戰友の看護には夜を日に次いで睡眠を忘れて没頭せり。深夜嚴寒の最中の氷取りから行動の整理、私は平素元気ですから絶体に病気にはなりませんと自信たっぷりで、上官戰友から涙の感謝を受けつゝ、一ヶ月を経過した。彼も遂に不幸病魔に犯される身となり、生死の界を彷徨しつゝ、幸にして生還する事を得た。彼に依って助けられ、今元気で祖国の土を踏む事を得た者、或は尚ソ連にて作業を継續し居る者の中で命の恩人として彼を仰ぐ者多からん。

独立戰車第一旅団戰車第三四聯隊二中隊
滿洲第一三〇四一部隊　　上等兵　△△△△△△

〈第三話〉北海道○○○○○○○○○○○　上等兵　○○○○

身を刺す様な冷たい風の吹くシベリヤ、今思い出しても身の毛がよだつ様です。○下四十度、五十度の極寒にも、不備な防寒服装で、朝眞暗い内に起こされて三ッ四ッ位の子供でさへも足りない量の飯を喰って、営門前に整列、顔が良く見へないために、各作業隊長は自分の隊員を掌握するのに、互ひに声をからして叫ぶのが、遠い山々にこだまして反響して来るのは、何か自らの運命がどん底のどん底の立場にある事を判然と感じさせる思ひだ。二十年の暮より二十一年の各一杯は、どれだけこゝニコライフスク収容所の同胞は、うえと寒さに苦しんだ事でせう。栄養失調の倒れ、凍傷で倒れ□千人を居た人員の内作業へ出されるものは、七百乃至千人出る事で□□□□…□□□□が無い狀態になった。この時、営内病院に勤務しておられた△△少尉軍医であったが、其の患者に対しての態度は眞に地方医も眞似の出来ない程な親切さで、良く労はって呉れて、親も及ばぬ程の手当をして呉れた。此の病院に入院した人には、相当手數でありますが、誰一人として讃へない人々はありません。唯々自然と頭が下るを如何とも仕難い人格者でした。この人によって、我々同胞はどれだけ助けられた事でせう。作業作業と労働を強いるソ聯人の手より、身を持ってかばって戴いた人格者です。

〈第四話〉長野縣○○○○○○○○○○○○○　少尉　○○○○

旧陸軍大尉△△△△　本籍　秋田縣

△△氏は、元陸軍大尉関東郡軍司令部附として、勤務中停戰により、新京混成十一大隊の編成に入りて、二〇年十月、一中隊長として入ソしました。黙々として率先、範を実行を以て部下を指導する誠は、克く同僚幹部間、又部下から尊敬信頼の念を起させたのです。一つの誠は總ゆる方面に遺憾なく表はれ、ソ聯側の信用も大でした。「入ソ」当初、先づ伐採作業が、入ソ聯側より課せられた時の一話。大体六名一組位の組を以て從事したのですが、或一組は、体力が弱く、思ふ様に作業量の出□□□△△氏は、勿論その儘にして置きませんでした。ソ聯側の監督と全作業を検視する□作業終了迄、自から援助を與へたのみでなく、その間、あの危険な伐採作業であれば□□も全般の危険に対する監視は怠ることが出来ま

せん。それを△△氏は遂行しました。肉体的、精神的労働の長い日を、実行を以て範を垂れた高遭なる精神は、誠に感服の外はありません。其の後、大隊副官作業につかれても、毎日僅かの睡眠で、夜おそくまで仕事して居られる△△氏の姿が良く見受けられました。現在、同氏はナホック最終集結地に於て、未だ一部歸らざる部下を待ち、無事歸還を祈りつゝ夛忙な集結地管理部業務にほん走して居られます。これも同氏の責任感の現れと察するところです。

〈第五話〉兵長　○○○○

終戦以後、ソ連に於ける生活を我々は体験し、苦難の途を暗黒の内に二ヶ星霜を送ったとは云へ、唯敗戦後の祖国を案じ、望郷の念にかられ、又親を思ひ妻子の安否を考へる時、一日も郷国の姿を頭に浮べざる日は無し。祖国再建、奮興に想をはせ、全ソ抑留者日本人は、一人として考へざるものは無し。我々ソ連抑留者數夛き中に、幸に早期帰還の出来た私は、祖国の姿を見る時、我が母の元に帰ったる時の様な、なつかしい氣持である。又我々は、祖国を後に、長き生活の内に視る時、変った姿とは云へ、溶溂以て觀めらるを得ざるものであります。平和日本建設への躍進、第一歩として、我々収容所に於て見聞せし、同胞友愛とも申すべき親身□絶す人間愛の戰友愛を御照介す。

私達、日常生活は、収容所には自体作業衣（収容所直營）と、所外出張作業（事業関係）とに区分され、照介せんとする。△△△△△君、本籍媛姫縣△△△△△△（母◇◇◇戸主◎◎氏）。該地収容所外織物工場に於て、作業中積採荷の荷崩に依り、下敷となり心身の不自由な身とならし、且又言語は勿論、身体感さえ、なきお気毒な方と成られたりを、▽▽▽▽君、廣島縣▽▽▽▽▽▽▽（高砂丸○五中隊）は、△△君の不自由な身の面度を見られる事、母が幼児を世話する如く食事に用便迄、或時は感覺を失せし爲、用便の不用意になりたる折も、度々▽▽君は嫌掛る世話をなされた。又帰国のため、出発の準備から出発より、設備の無い貨車で、モスクワ近くより九六〇〇粁の長途、廿三日間の車中、最終々結地係員に引渡され、船中と実に半ケ年有餘の長き渡り、収容所抑留者に替りお世話下されたる事を、我々は深甚なる敬意を表すると共に、我々の亀鑑せん。又之を世人に被厂し、日本再建のため儘かなしたいと思ふ。

〈第六話〉兵庫縣○○○○○　上等兵　○○○

△△△△君は、北海道△△△△△△△△△村の生れです。

此の人は、在ソ中自己の職責を良く遂行され、ラーゲルに於てもソ軍側將校より△△、△△と云って、可愛がられて居りましたし、良く働く青年でした。彼が或日、我々ラーゲルの食量パンを受量に行く途中、ラーゲルの前を流れる小川、約巾15、16米位で、流れは急な川です。朝その日は、特に急解けで増水して居りました。彼は、2K位の道を馬車に身をまかせて行く。途中、ラアゲルを離れる事3Kの地に、子供が大勢集まって何事かと思ひ見れば、3才位の少女が濁流に流され、おぼれて居る。彼は馬車を止める。まもあらばこそ、その濁流に飛び込み、救助したその少女は、我々が鋼山に同じく働いて居るソ連人の子供でした。自己の立場、食糧受授の重大な役目をなげうって、日本人の誰もが持つ意気を出した。此れ日本人が誰もが皆、その時に出合ったならば、当然行った行動でしよ。それに対し、鋼山長、二〇〇留の鋼山公益を持って、此れに皮製の新調靴一足とをもって應えた。実に、彼等ソ連人に対日本人の面目立ってた。誰しもが出る日本人の本能なれど、敵地に取られたる心の荒さんでゐる時、中々出来るものではない。此れは、日本国全体の誇りを敵地に取らわれの身でありながら示した事は、日本全人民が高く評かすべきだと信じて、筆を取った次第です。此れ願えれば、全人民に知らせたき心であります。

〈第七話〉北海道○○○○○○○○○○○○　一等兵　○○○○

シベリヤの或収容所の作業班長に、△△某なる非常に戰友愛に溢れた、又日常に部下の日常生活、及心境に細心深く面倒見て居た某氏は、身体作業長としての健康狀態に勝れずも、尚率先、自己の身体を反り省ず、陳頭指導を取り、収容所第一の成績を収め、ソ側よりも非常なる信用を得た小隊を作りあげました。然し、その願いは、涙の出る様な外面尓は現はない行爲が幾夛ありし事が左記の二、三の例を記します。

極寒冷下五〇度、作業は中止命令が収容所長より来多るも、監視人は作業は續行させ、丁度その日分隊員中尓風邪頭痛のため、収容所尓て軍医の診断を受け多るも休養を貰へず、作業場へ出場の止むなく尓到り、△△軍曹は監視人尓事情を訴へ、他の分隊員にてこれを完ふすべく懇請したるも、只否の言葉だけにて、一寸の同情もありません。自己の外套を彼に着せ、当然彼は収容所尓帰りて、その責任尓て五日間の営倉を甘受す。収容所に於ける兵隊は、此処二ヶ月ばかり全々煙草の配給がなく、既に兵隊全員の時計もバンドも全くその煙草と交換出来る物は煙草尓成って、今は只ロスケの喫煙を眺めて投げた吸殻を競って捨ひ、それを吸

ふのを見た△△軍曹は、彼の父が樺太大海漁業組合より贈られた記念の時計尓て、今忌き父の遺品多る時計を遂に煙草と交換をして、一服をも彼は取らず、小隊全員に分配を成し、小隊全員の喜ぶ顔を眺め、間もなく栄養失調尓て入院して行きました半年后某収容所尓て元気な彼に逢ふ事が出来ました。

〈第八—十一話〉廣島縣〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇〇

祖国を遠く一万数千粁北ヨーロッパのモスコーの南、ウクライナとの凡中間にあるマルシヤンスク第七〇六四収容所に將校を基幹とする約四千名の一団がある。全員たゞ帰国を夢みつつ作業してゐるが、固く結ばれた日本人愛のどれ一つ取り上げても、美談なしずるものはないが、日本人団が等しく認め、日本人団によって褒賞された二、三を取り上げよう。但し、所属部隊、及本籍は今わかりかねる。

昭和二十一年八月、終戦一周年の日に▽▽▽氏が表賞された。彼は、洗濯場勤務として、入ソ以来全日本人の衣服の洗濯を一手に引受け、常にさっぱりした衣服を吾々に着せて呉れた。のみならず患者の衣服が、大小便でよごれてゐるのを率先して洗濯してくれたのである。

其二、某兵が病気で倒れるや、一日の作業の疲れもかまわず、その患者の身廻り一切を世話をし、大小便にも夜中かまわず自身の肩を貸してやり、翌日はその身で又作業に出てゆくと云った献身振りには、全く涙が出たのである。残念乍ら、その美談の主の氏名は記憶にないが、數日前に上陸してゐる筈です。

其三、ラーゲルより三十粁の森林伐採は、誰も最も嫌がる作業である。入ソ間もなく第一次、伐採三百名が出発した。確か二十一年二月頃と記憶してゐるが、△△伍長は、同作業中自然倒壊の古木が彼の部下の頭上に襲ひかゝらんとした。危険を際した△△は、間一髪その男をつきとばすや、自身は積雪に自由が利かず、遂に倒木の下敷となり、吾が梯団初の犠牲となって幽冥に赴いたのだ。

其記、ラーゲリより数十粁の出張作業地はビアジルは、筆舌に盡せぬ虐待をうけたこの上かゝる狀態が續くと固地に働く同胞は倒れてしまふだからと意を決した◇◇中尉（一〇八師三七二聯隊）は、ブンゲル覚悟で夜間單身ラーゲルソ側収容所長に直訴すべく脱出した途中、同作業地のソ聯人の追跡を巧みのがれ、翌未明ラーゲル到着所長に窮狀を訴へたのである。この英雄的行爲により、同作業地の待遇は一変化された事は云ふ迄もない。かく数へ上げれば限りない。今その二、三を記すに止める。

〈第十二話〉東京都〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇

「抑留生活に於ける美談」と云ふ題目に果して適合するや否やは分からないが、私が昭和二十一年一月二十八日、病院を退院して収容せられて、約満四ヶ月を送った「ムーリン」地區の一〇三収容所に於ける生活こそ、二年間の抑留生活を通じ、最も印象深く感激的のものであったので、拙い筆を採ってその生活の一端を紹介する。当収容所は、「オツカー」収容所（註）であり、いはゞ作業で身体を消耗した弱体者の休養所であって、私は四十才の旧一兵□であり、屡々身体を損ね、所謂「オツカー」収容所も二三ヶ所渡り歩いたが、当収容所に於ける生活程、我々作業に仆れた弱体者を温い心で傷はり、物心両面より至れり盡せりの保護を受け、今日、祖国再建の更生の意気を以って、祖国に再起出来たのも偏に当収容所のお蔭であると信ずる。此所の所長は、婦人の所長で年齢三〇才位の美しい人であるが、唯美しいと言ふ丈でなく、所謂日本の女親分と言った男をも凌ぐ熱情と度狭の特主であり、大分日本人びいきで、我々三百名余りの捕虜を随分可愛がって呉れた。例へば、弱体者の収容所と言っても、自活作業は勿論あり、又男の監督（ソ連側の）將校（仝）は、自活作業の外におほぴらには出来ないが、色々の彼等に都合の良い仕事を命じたりする。我々の所長はこう言ふ事を知ると、彼等を叱りとばして我々を庇って呉れ、又〇下三〇度、四〇度の厳寒の時は、自活の薪運び、水運びも不可ないと言って、休ませて呉れたことも屡々、又そう言った自活作業を弱体者に人力のみでやらせるのは無理だと言って、牛馬を入れて蓄力で運搬の計画を樹て呉れた。又所内の内務生活の方面でも、監督や將校が絶えず廻って歩いて色々指導するが、彼等は兎角喧しく言ふ許りであるが、所長は其の間絶えず温情を堪へて廻り、將棋や白樺製の麻雀を楽んでゐる時など、十分でも二十分でも一所に腰を下して煙草を一腹つけ、ぷつと一服吹いて「十」上げますと云ひながら、煙草に缺乏してゐる我々に煙草を惠み、「リラショーダー」（お旨しいですか）と尋ね、にこにこして將棋や麻雀の遊び方を聞いたりする。又給与方面でもさすが嬉んだだけに、細い所迄指導して、どんな物を喰べさしたら我々弱体者の身体を回復するかと、或はコロッケを作らしたり、黒パンを油でいためたり、ソーセージの混ぜご飯を作らしたり、捕慮の事とて材料とて數量とて大したことはないが、その貧弱な材料を活かして、外に楽しみの無い我々捕慮の三度三度の食事を随分楽しいものにして呉れたのである。此の所長が我々を傷う

て呉れた事は、数限り無く沢山あるが、紙数の関係もあるので唯一、二の例を擧げたに過ぎないが、実に我々弱体者は此の国境を越えた国際的の人道主義に立った所長の保護に感謝し、本年五月一日の「メーデ」の祭日には、所長への感激沈議を三〇〇名の収容者万来の拍手を以て所長に送ったのである。此の収容所は、此の名所長が立派であるに加へ、大隊長以下日本側の幹部の人達が、所謂民主運動と云ふ運動が起る前から実質的に所内生活を民主化し、大隊長の△△大尉と云ふ方は、早くから卒先階級章を外し、自ら斧を振って自分でこつこつと所内の自活作業をやられ、兵隊と同じ物を喰べ、同じ気持で作業をやり、大隊長がそうだから、外の幹部も將校も少しも偉ぶった事なく、我々と同じ仲間のやうに生活を共にし、暇の時は我々の宿舎（將校さんの方から將棋や碁をやりに来て、余り上等でも無い我々の毛布の上で何時間も一緒にたのしむと云った調子で、將校も兵隊も全く階級無く、同じ日本人だと云ふ所内の明朗生活が、長い勞役生活で身も心も疲れ果てた我々の身心の休養に如何程大きな効果があったか。実に大きな意義があったものと思ふ。断片的な一文を草して舞鶴上陸当地の感激の生活の終りに当り、抑留生活の感激の一端とする。

〈第一三話〉東京都〇〇〇〇〇〇〇　伍長　〇〇〇

それは、吹く風も肌をさうやうな、冷たいシベリヤ沿海州十二日初旬或日のたそがれ時のことだった。

我々の部隊は、鐵橋の基礎工事に從事して居た。入「ソ」して未だ日も浅く、露人監督との仲も思ふやうにならず、唯ガミガミ分らぬ言葉でどなられ乍ら、辛い作業を強ひられ、心中甚だ面白くなく、又非常に反感と憎悪とをいだいていた。その日も亦作業が思ふやうに行かぬので、監督がガミガミどなって来た。そもそも、少し下流の方に当った方で異様な聲が起った。見れば附近に遊んでいた監督の子供が川に落ちて流されて行くではないか。外の居合せた露人も亦日本の兵隊も、只アレヨアレヨと傍觀していた。其の時、三中隊の△△△君は、勇敢にも寒風すさぶ中に、上衣を素早くぬぎ捨て、氷の如き流れにざんぶと飛び込み、下流さして泳ぎ、十分十五分二十分と時は流れる。人々は、目をみはって彼の行動を見つめていた。やがて、彼の身体が見えなくなったと思ふと、再び水面に姿を現はしたと思ふや、向ひ岸に泳ぎついた。見れば、片腕にはあの水に溺れんとしていた幼子がしつかりいだかれているではないか。部隊の將校も下士官も兵も、どっと觀聲を上げて、彼の方にかけて行き、彼の行動をほめたゝえた。彼△△君は、寒さにふるへ乍ら、恥しさうにして「何んでもありません」人として当りまえの事をしただけです□つて皆のぬいだよせ集めの被服に着替え、又平然と作業を續け様とした。監督もいとしい愛児の生命を助けて呉れた恩人たる△△君の手をとり、嬉しなきにないた。そ□人類の差別、又小さな私情を超越した人間愛の発露と、眞の日本人の心の美しさ□知った露人の手を握り合ひた光景は、我々見ている者まで目頭の熱くなるの□を覚えた。

〈第一四話〉島根縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇〇〇

沿海洲病院美談

私達は夢にも想像しなかった昭和二十年八月十四の無條件降伏の報導は、大なる衝激でした。敗戰の結果は、東京に歸へるのだと、ロスケにだまされながら汽車に乗せられ、トルスト井の小説「復活」で名高いシベリヤの曠野につれられて来ました。着くやいなや、私達を待って居たのは、酷寒の原始林の伐材や鉄道作業でした。それも全く驚く程の粗悪な食料で、高粱や大豆粉の少ない強制労働をさせられました。その結果は、云はなくつても分るでせうが、多くの戰友がばたばたたおれて行きました。我もその一人で、ついにムーリン地区の第一四四九病院に、栄養失調で地獄繪に出て来る人の様にやせて入院しました。そこで驚いたことには、栄養失調や急性肺炎で、毎日同胞が次から次へ死んで行くことでした。その病院生活で、私は非常に感激させられる光景に度々出合ひました。それは、比較的に回復した患者が、病室内の戰友で不自由な重患者を親身もおよばぬ程の面倒をみて居ることです。患者の糞便のしまつは、勿論夜は就寢後を見廻り毛布をかけなほしたり、ペーチカの温度の調整と云ふ風に、又栄養失調もひどくなると食事が進まなくなります。すると炊事の行って米の有る時は少ない糧秣の内から、三度三度米のかゆをつくってやるとか、又熱のある患者には赤大根で色を付けた、目を樂しませるとか、又酢附けの魚、野菜を患者にたべさせます。炊事勤務も又私達の戰友でたつた四人で澤山の患者の食事の心配をするのです。この悪□環境の下で、私達同胞は夢にも忘れたことのない祖国日本に歸りたいために、言語に絶した労苦をなめながら、たつた一つの戰友愛で戰ひながら、お互ひになぐさめ、はげまし合って来ました。愛こそは人間最高の美だと云ふことをつくづく知りました。

〈第一五話〉〈鳥取県〉〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　〇〇〇〇方　〇〇〇

昨年の盛夏の出来事であります。

今日も又、帰還を念じつゝ入坑し、監督より命ぜられた作業に從事して居った換氣班員（註一）は、突然、坑内に変事のあったを感じました。日本人の死傷者でも無ければ、軽い気持で、然し気になるのか一人が仕事を投げ出して見に行った結果、ホサチク（註二）が作業中落盤によって埋て居るも、狀況不良のためとても救出出来ない。要は、総炭坑本部救護班の出勤に依らなければ、然し距離は四粁以上もある。間に合ひそうもない。切羽監督は、救護部隊の来るを待って處置を講ずるらしい。全員は、作業を中止して現場へ。本人の同僚はなすべきしらず幸で居る。死は時間の問題である。日頃余り同切羽の日本人尓好感を持れて居ない人尓は、危険迄してとんでもない事だと云ふのが全員の気持ちであった。元気な聲で救を求めて居ったのも、時間の経過と共尓うすらいで行く。此の実狀を一誌尓見て居った我々乃①班長は突然「己が入る」と云って、我々班員、切羽全員の引引止るを振り切って飛込で行った。然し、大きい落盤である。一人の力ではどうにもならない。時々バサバサと落る音もきこえる。エンビで投出せば、くづれ落る。まるでサイのかはらの石積とは此の事であろう。彼の呼吸も次第に大きくなる。これを見てゐた日本人は、彼の偉大なる姿尓日本人的性格をよみがへさせられ、次々飛び込んで行った。然し、切羽は狭い四、五名で一杯だ。皆全身の力をヘンピに入れ、投げ出す。又くづれる。各人、交退交退で投出す。埋った当人の同僚も交退しだした。大きな落盤□□□□見えてくづされる。埋ったブルガリヤ人の肩が見える。皆は力づく。ようやくにして□□□□□全く呼吸はない程である。坑内備付のタンカにのせ、同僚は坑内□□□□□□然として居った監督は、まるで此の□□（以下、判読不能）。

我々にも切羽より出て行と云ふ。彼は「さあ仕事だと、汚を拭き拭き何事も無った様尓班員を促して、切羽を出た私は、此の一言に依って「之れが日本人」と云ふ説い感情にうたれながら彼尓從った。増産日尓は、誰の作業を中止して、よく此の切羽に應援出炭作業尓やられ、この埋まったブルガリヤ人から、随分ダワイ（註三）をかけられたものだ。第二次帰還の選に入り、ナツカシイ祖国の地で筆を取りながら、彼の「己がやる」、「さあ仕事だ」と云った当時を思ひ出し、胸の熱くなるのを感じ、彼の健在を祈り筆を止めます。

◎埋つたブルガリヤ人は六ケ月程で全治なし、不変日本人尓ダロイをかけて居ります

◎総炭坑本部から乃救護班は来なかった様でした。

課題から道を外して、又つたない文で当時の病者が出来ない事を遺憾尓思ひ□

□

註一．坑内の換業瓦斯檢出を主として始る作業班

註二．切羽移動の際午迫石炭を取った間ゲキを人爲的に落盤させるを目的とした作業員

註三．ソ連人独特の言葉アラユル命令形の場合尓使用されて居ります。仕事せよ。物を買ふ、戸を閉める際尓て、ダワイ此の一言尓、在ソ日本人は苦しんで居ります

〈第一六話〉長野縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　少尉　〇〇〇

はるばる千里、故郷遠き北極星の眞下に、たえがたきに耐え、忍びがたきを忍び、虜囚生活二年の間に、様々なるものを体剣して来た。その所感を□□綴る。

一、ソ聯邦は世界一進歩せる民主的国家として誇っているが、決してそうではない。表面的には自由民主を唱へるが、事実は一国一党の專制法治国家で民意も自由を空念佛、一部の党員は己の機勢をほしいまゝにし、民衆はノルマー（作業規準量）、チョローマー（投獄）で苦しめられても、何等これに反ばくする事も出来ず、忍從の生活を追ってる。

二、ソ聯は世界の恒久平和を唱へてゐるが、思想的目に見えざる武器をもって執拗に世界制覇侵噶を強力に行なってる。決してソ聯は平和愛好国ではない。

三、ソ聯は働なかない。在ソ中、日本人の方をはるかに作業成績を上ってゐる日本人とソ聯人が共同作業の時は、日本人の作業パーセントの頭をはね、ソ聯人が奪ってゐた。それ故、日本人が一生懸命働いても、ソ軍収容所労務係が働かぬと言って、我々を營倉に入れたり、減食させられたりしてくるしめられた。私の居た三十三収容所の第一分所は、石炭を掘って居たが第一分所の日本人が内地に帰えって、ソ聯人がそのあとを全部やって居るが、出炭成績は半分になってしまひ、現在ソ聯では五ケ年計画で各種の事業を遂行してゐるが働かず、賃金を多く拂はねばならない。ソ聯人より働き、しかも賃金も安く又、何等不平反ばくも出来ぬ日本人の方が作業成績も上る故に、在ソ同胞の引揚を何かと理由いけ、帰還を送らせてゐる原因の一つであらう。

四、シベリヤは流刑地のせいもあろうが、民衆の知識程度の低い事と、情操道徳と言ふ様な美点は寸分もみられない。時々、彼等の言ふインテリゲンチヤーが傑作な質問を兵隊あたりにして、兵隊に嘲笑されたり、又若い男女がみだらな行爲を日晝平然としてみせたりしてゐた。泥棒の多い事にもおそらくよく作業中、我々の衣服物品を盗まれて、全く一寸の油断もゆるされない。

五、一般民衆は、特に帝制時代を知る者は、よく個人同志の話合になると、我々にも反スターリン的な言語を洩らし、現在のソ聯の社會国家桟樓を徹底的

に悪く言ってゐた。

六、食物の事になると、これ程うるさい国民はあるまい。ソ聯同志二、三人よると、必ず自分は昨日パンをいくら貰った。バターをいくら貰った等、語りつゝ、ともすればソ聯人は働いてから食ふ国である故かもしれぬが、一寸、日本人の心理からはおしはかれぬものがある。

七、本年の夏、小学桟の先生が炭礦で働いてゐて、理由をきくと、夏休になって働かねばその間、食へぬからだと彼は答へた。食ふと言ふ事はさておき、人間は働ける内は働かねばならないとしてる彼等の、労働は神聖なりと言ふ点は吾人も大いに学ぶべきものがある。

以上、まとまりもなき所感を述べたのであるが、今尚、在ソ同胞四十余万の人々がこれからの冬を迎へて、いかに健康者が残るとは言へ、我等二ケ年の体験よりみて、これから不幸なる犠牲者の出るを思へば、帰還の一日も早からん事を祈って止まない。

〈第一七話〉山梨縣〇〇〇〇〇〇〇〇　中尉　〇〇〇〇

〝在ソ間の所感〟ーから課題されてみると、過去二年の苦役に呻吟し、敗戦に泣血しながら唯、己一個のみに於て、苦しみ泣くより外に術がなかった。そして、どうやらそれらを超克しえたこの心身が、一度に波さわぎ、大きく揺れ動くのを覚える。寒苦と労苦、それらに鍛えられた鉄臂の如き堰堤も、心の打つ大波に崩れゆかんとする。今この課題を前にし、やうやくその奔流のはけ口を見出したやうなうれしさである。然し私は、猶それが情の激流となることを恐れると共に、冷却な人間ばなれのメスを下すことをも自ら戒めるものである。在ソ生活二カ年を通じ、私の最も遺憾とし日本国民の反省を願ひたいことは、民族的偏見である。島国に大平の中に育った日本人は、余りにも我が強すぎる。自惚の強い、従って排他的な理解力と信頼とを持てぬ人口が多い。些細なソ側軍部の、個々人の人格の、特に不遜な態度の片輪に依って、直ちその全貌と断ずる如き嫌が多分にある。私は、自己内の本能的反撥心をじっとおさへて、ソ側の意のある善意に解してきたが、我々に対する給与の点に於て、入ソ当初の待遇は全く不完全不備であった。それ故に、シベリヤの極寒のため、最初の冬、多大の犠牲者を出さるるを得なかった。我々は、一ケ月の準備期間を以て、シベリヤに於ける未だ嘗つて経験した事のない〇下六十度の冬をこえるために、ソ側より与へられざるまゝに盗犯して資材を集拾し、努力に最前をつくしたのであるが、抑留者を収容する何らの設備の無かったことは、寧ろ原野に放り出されたと言って過言であるまい。戦後、ソ聯の窮乏は恐ろしい程であった。入ソ輸送車中から収容所生活間、私らの持物は、私物品検査にと稱する検査毎にまき上げられ、日に日に減少しゆくばかり。のみならず盗まれる事は何回か、敗戦者の物を勝利者がぬすまれなどと、我々には考へられなかった。

その後、私等の体力の著しい消耗死者の續出に驚いてか、やうやく給与に懸命になり始めた。現在の給与には、窮乏の中から最大限のなしうる限りをつくしてゐる。ソ側の苦心が感ぜられる。私等は、彼等の私に対する取扱の一時的な不全、乃至物資保障程度、或は個人の人格にからむ雑多な反ソ感情をすてゝ、この二年与えられた少なからぬ配慮に謝するものである。

〈第一八話〉静岡縣〇〇〇〇〇〇〇〇　准尉　〇〇〇〇

昭和二十年十一月三日、蘇満国境里河ブラゴエチエンスタ通過シベリヤ鐵道に依り、十一月二十四日、ハカース自治州（主府アバカン）カビラールに下車、同地より自動車に依り、西南方一〇〇粁トランスバアル（金礦山）にて坑夫とし、労務に服す。此間、長途の旅行と、給養給與の不良の爲の下痢患者續出す。十一月二十六日、アバカン地区（第三十三収容所第五収容所）に収容せられ、一部（ギードラ）に下り、材採作業に服す。同地方は、交通の不便と厳寒のため、糧秣の輸送に事かき、当箸当時、一日二食スープ（カキゴー）に二杯ー四杯パン一五〇瓦は給せられたり。兵は、長途の輸送と厳寒のため、体力は消耗し、空腹且寒さの厳さのため、栄養失調症となり、死亡者續出す。昭和二十一年二月十五日より三月十五日迄の死亡数六十名を越せり。而して、ソ軍側にては此れが対策をするのみか、検査とか調査とか云ふ名目の下に、所持せる金銭物品の強奪を計り、意に從はざる時には、銃劍を突き付けて発砲迄して威嚇強奪す。又蘇聯兵の中に俘虜の食糧を盗み、北方人に賣却し、其の発かくを防ぐ爲め、俘虜の作動する等、蘇聯人の總てが盗人であるかの感を抱かしめたり、又収容所内は、積雪に埋り、且室内に於て、焚火をすれば、屋根裏の雪が解け、常に被服類寝具類は水びたしの情況で、生地獄其の儘の姿である。昭和二十一年五月、同収容所を薩る時、健全に降り得る者、僅少四五十名を算するにすぎず、昭和二十一年四月、小生は入院の予定にて、山を降りたるも、カピラールに於て変更、アバカン地区ナヨリネゴルスク町に到着、第三十三収容所第一収容所に収容、同収容所に於て一ヶ月静養せり。昭和二十一年四月二十七日、突然、將校准士官五十余名は、自動車に分乗せられ、同地を出発、アライゴーワ（運河工事に從事）第三十三収容所第七収容所に収容、土工作業に從事す。同収容所に於ける給養は、本労働にたへ得る

程度の給与なるも、労働時間は実に十五時間を越る事は僅くなかった。被服、及貴重品の強奪する前、収容所と変り無く、將校准士官の作業は、一般兵と共に労働に服し、時に依り將校作業隊をして一般兵より過重労働に服せしめられたるため、体力は一般の者より低下し、栄養失調症の者を発生せり。小生、又栄養失調症のため、十月クラヌナヤスクの病院に入院、同病院に、昭和二十二年二月迄入院、三月よりチヨリネゴルスカ第三十二収容所第二収容所に収容、同収容所に於て鉄材運搬に従事す。四月六日、第三十三地区の収容所は帰還の途に付たるも、將校准士官、及下士官兵の憲兵、元警察官特務機関者はクラスナヤスク（將校准士官は、第三十四収容所第三其の他に第五収容所）に収容所、引續労働に従事す。吾等、將校准士官は建築作業に当りたり。十月五日、帰還のためクラスノヤルスクを出発す。今回帰還の理由は、本年四月將校は、帰還せしむ可からずとの最高部の指令のことで、九月、突然解除されたと聞く。又日本側にて將校の帰還を認めずとも聞く。之れら要するに、吾等去行三年間の俘虜生活は、忍苦の二年であり、又地獄の生活である。忍びに忍び来た。そして、喜びの今月を迎へ□□新日本のため、將来の日本のため、働く事の出来る事を何に依りも幸福に思ふのである。而し、忍苦の二年、地獄の生活の二年間を犬死させては死んで行く霊にすまぬ、又生を得て故郷に帰ってかいが無いのである。

ソ聯を、抱して云ふなれば盗人国、嘘の国、暗黒の国、魔の国、光無い国とも言ふ様、それは国家の制度政作が一般民衆にその様にさせて居るのではな□かと思ふ。働かざれば喰ふ可からずと言ふが、ソ聯に於ては働いても喰へないと言ふ実情では無いだろうか。喰に苦しむから物を取る。嘘を言ふ一例をあげれば百％働かなかったなれば、一般家庭の活力となるパンが支給にならず。又百％働いても支給の無き事も僅少ではない。衰弱者に百％働けと言っても、無理な事であり、又出来様筈がない、老衰者又然り、国家で保護せる如く定められては有るが、それも地方権力者の一部にそくばくされて、要意に保護を受けるに至ら無い実情である。労働者が二日も三日、食糧の支給を受けず空腹を抱へ働き、俘虜の食事を盗む事は見新事件ではない。強制無き国と宣傳はすれども、食に依り強制圧制をして居る事実は見逃がせない事である。我等も毎々にこの食物で圧制せられて来て、苦しい二年を過ごして来た事実である。又、策略の国である。策略を計る事はソ聯人の上下を問はず実に上手である。總べて、策略をもってだまして居る。そして、宣傳によりだまして、国民をして食と策略と宣傳により目暗にして居る。吾等、俘虜に対す總がこの策謀と僞瞞である。其れは□者も日本人であるからは、要意に認知する事が出来る。思想方面に関して、トラスバーアル、及びアライコーフに於いては余り認めなかったが、チヨリネゴル第一収容所、及びフラスナヤスナヤスクに於ける思想赤化運動の情況は、収容所内に於いて民主グループをして策謀も、これに依り一般兵に呼び掛けて居る。彼らの叫ぶ民主日本の建設は、唯赤色のみと思って居るのではないだろうか。民主主義の民主たる処、意義、主眼の抱握がぴんとがはずれて居るのではないかと思ふ。もし、この□□の思想を日本にもたらしたなれば、国民はソ聯の国民と同様、平和な明るい日本を建設する事は及びもつかぬと思ふ。（ナホトカ）に来て、一般と輛を掛け、帰還者その者も熱意ある民主グループの運動に僅からず動かされたのではないかと思ふ感が見た。尚二年の間、各地の収容所に於て、日本人同志が共に斗争をして居る姿を認め、將来の日本が気になってならない。生を得んが爲か、其の弱点を突つてソ聯の策謀は民主グループをして、喰入って行った姿が、そして今、生れんとす日本はどうなるのか。唯其れのみか心配になって来るのでした。現在の私にも未だ眞の民主々義とはどんなものであるかわ、わかりませんが、実情を見て来た私には、ソ聯の国民は眞の明るい処は見うけられなかった。暗い、そして喰に追はれ、生るがために唯々わめき働いて居るとしか見れない気の毒な国民であると思ふ。上陸第一歩の現在の私の總てが夢の中にある様で、又、頭がぼけて居て、字も思ひ出す事が出来ないので、誤字の多い事で判讀しにくいと思ひますが、新日本のために失礼ではありますが、一筆書かせて戴きました判讀下さい。

〈第一九話〉上等兵　○○○○

一、氏名　曹長　◇◇◇◇◇　福岡県◇◇◇◇◇◇

上等兵　△△△△　樺太△△△△△△

一、資料

日本軍人、及警官が樺太大泊をソ連に収容、二十年九月十五日、第一大隊六泊港出発せし後、ソ連の宣傳は日本送還ずみとあり、第二大隊員、第三大隊員は喜び合ってゐたところ、第二大隊は二十五日、大泊を出航、一同故国の土を踏むよろこびに雀躍したが、豈計らんや、上陸したのはソ領北であり、エハビ収容所に入り、強制労働が始められた。

そこで二名は、日本へ潜入。該地区二千の同胞の帰還、政府尓嘆願すべくも不能なる時は、殆んど凡てが南樺太出身なる故に、家族達に報道すべく生還を期せず、隊長宛に遺書と同胞救出の衰情を書き残し、十月六日、収容所を潜出、日々草の根をかみ、水を啜り、栄養失調をあへぎながらも、見知らぬ山中を彷徨、毎朝東天を拝し、皇室の彌栄を寿ぎ、日本再建の健やかならむことを語り、日々の生存を喜び合ってゐた。そして国境（旧）線近くまで辿り着いたが不幸ソ聯に捕へられ、二十四日、半死半生の身ながら送還され

たのである。そして、ソ側へは、その償ひとして、セルモヨーゼル（地名）の懲治部隊に送られて、その強制労働を（筆舌を超えた労働を、不足な食料を強行されたのだ）果して帰るや、日、一日と勢力を得ると、共産思想派の制肘の中に飽く迄、節をまげず該派が反動分子として弾圧せんと、種々盡策したが、同じ作業場に在っては、超人的な努力を以て、労働のプロセントの昂上をもたらしたが、故にソ側企業側の反対のため摘発を得ず、内一名△△君は、□日本国帰還となった。彼は友、◇◇君の遺児の健全な教育□育成を誓って来た。彼は必ずや、ソ連領在処軍人の救出に力を注ぐであらうことを信ずる。想像を絶した共産思想派の天下を取ってゐる北樺太の収容所にあり、我々は、我々自由思想者は、凡ゆる迫害をほうむりつゝ、今日に至った中□彼等は最もその代表的だった者であるを再記して拙文を畢る。

〈第二〇話〉福井縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇　二等兵　〇〇〇〇

シベリヤの夜、はりつめた氷に鎌の如き三日月の光を投じ、家々の燈火、そして枯木は黒々蔭の如く立って居た。物すごくほえる犬の遠吠もきこえない。こゝは、故国をはなれる事何百里、嵐の都コムソモリヌク八九三病院の一室、心なき患者さんの寝息にまじって、こきりに何かつぶやいて居る、后もう幾日もないと思ふ。戰友のために之が彼の姿だった。厳寒と戰ひ戰ひ、遂に病魔の見舞ふ身となった戰友に対し、優しく元気よく、たのしげに話しかける彼の姿、実に我々にとっては、羨望の的となってゐた。彼の任事としては、朝八時より夕方五時迄、その間ロシヤ側看護婦の手傳となってゐるのだけれど、全々患者に対して配慮をしてくれない看護婦の仕事迄、受持たねばならなかった。又夜は夜で、遅く迄病室内を巡視し、夜勤看護婦に対してさいそくするのが常であり、重患者なる時は寝ずとも見守るくらいで、実に涙ぐましい努力だった。私も、彼の手にてなき命を救って、本日この故国の方一歩を踏む事が出来た事に就尚一層彼の偉大なる恩に感謝し、ここに一筆つたなき筆を執った次第であります。

△△△△　　福岡縣△△△△△△△△

〈第二一話〉京都府〇〇〇〇〇〇〇〇　〇〇〇〇

関東軍佳木斯特務機関、▽▽少尉（現在コンソモリスク將校収容所に残留）は、昭和20、10、佳木斯□王力収容所収容所に於て、佳木斯突撃大隊長△△大尉（愛知縣人現在斯□述、將校収容所残留）ノ大隊編成下に在り、以来昭和21、10月上旬に至る在、ハバロフスク洲トロイスク地区、林業所チウ（ハバロフスク市東南方三四〇粁地点と推定）収容所に於て、兵員四〇〇名の指揮をとり、伐採、開墾、道路作業に従事す。此の間の兵の精神的、肉体的、苦痛を身を以て慰撫し、兵の前衛として、ソ側との諸交渉に当り、特に給与に関しては、絶対的に有利に導き、或又、作業監督との交渉に、強行に兵の体力を保護する等、兵員の信望絶大なり。当大隊四〇〇名の就労伐採中の死亡者、僅に十五名に止るも之、ひとえに△△大隊長、及▽▽少尉等の部下に対する愛情に依るものにして、▽▽少尉の如く、ソ側と兵の中間に立ちて、我等の立場を保護せられたる苦労は、絶対的に感謝するものなり。昭斯□20、10月中間、伐採業務終了し、ハバロフスク十六地区轉属、續いて十六地区十三分所に轉属せしも、作業給与面に於けるソ側との交渉、部下掌握、適切にして十二分所に於ける兵員の信望、又絶大なりき。現在在役中、職掌上取調のため残留されあるも、一日も早く復員されん事を祈願するものなり。